

## 令和7年度 学校評価アンケート集計結果及び考察（お知らせ）

残寒の候、保護者の皆さまには日頃より、本校の教育活動へのご理解・ご協力を賜り誠にありがとうございます。また、12月に実施いたしました学校評価アンケートへのご協力につきましても大変お世話になりました。標記の件につきまして報告いたします。

全校生徒・保護者ならびに教職員のアンケート結果を集計し検証を進めていく中で、学校の状況に関する共通理解を再確認することができ、本校教育の水準の向上と保証、相互の連携強化につながるものと期待しているところです。本結果を受け、次年度以降の学校運営上の改善や生徒がより良い教育活動等を享受できる環境整備等に、学校として組織的・継続的な改善を図つていけるように、学校づくりを進めて参ります。今後とも、本校教育活動へのご協力方、どうぞよろしくお願ひいたします。

評価項目	評価	取組・達成状況	改善の方向性	
1 組織運営	A	生徒の91%、保護者の89%が「学校生活への充足感」を示し、魅力ある学校づくりに向けた組織的マネジメントが着実に成果を上げている。教職員の意識改革も浸透し、安定した学校運営が図られている点は高く評価できる。	肯定的な評価は高水準を維持しているものの、昨年度比では微減傾向にあることは看過できない。生徒・保護者の潜在的なニーズを再検証し、信頼関係を深める情報発信の強化と、教育活動のさらなる質の向上を図りたい。	
2 施設・設備	A	衛生環境や空調設備の整備が学習者の満足度に直結しており、9割を超える生徒・教職員が「学習に専念できる環境」と評価している。また、生徒の美化意識も醸成されており、清掃活動が自治的活動として定着してきている。	施設・設備の維持管理に加え、今後はそれらを活用した「学習環境の質的向上」を目指す。老朽化への計画的な対応とともに、公共心を育む観点から、生徒自身が学習環境を保持・管理する当事者意識を一層高めたい。	
知	3 授業改善	A	先行課題を授業導入部と有機的に連動させたことで、生徒が学習の見通しを持って授業に臨む姿勢が確立された。この「予習→授業」のサイクルが奏功し、授業理解度は84%の高水準を維持、主体的参加意欲の向上に大きく寄与している。	家庭学習を「こなす」段階から、自らの課題を見出す「質の高い自学」へ深化させることが課題である。先行課題による理解度の個人差解消に向け、個に応じた課題設定や、自己調整学習の定着を図る指導を強化したい。
	4 ICT 活用	A	端末操作スキルは生徒の98%が習得し、前年比+9ポイントと飛躍的な向上を見せ、「文房具としてのICT」が確立された。また、9割以上の生徒がICT活用による授業の質の向上を実感しており、学習基盤として定着している。	操作スキルの習得段階を脱し、今後は「思考・判断・表現」を深めるツールとしての活用へ深化させる必要がある。単なる検索・提示に留まらず、協働的な知の構築や個別最適な学びを支援する効果的な活用を研究したい。
	5 個別最適な学び	B	「自己のペースや適性に合った学習」を実感する生徒が91%へと増加し、個に応じた指導体制の成果が顕著に表れている。教職員も個別の教育的ニーズを捉えた授業づくりに注力しており、学習者の安心感につながっている。	知識定着の課題に対し、放課後学習を「個の学びを補充・深化させる場」へ再構築することが急務である。学校内での支援を通じ、生徒が自ら学習過程を調整・完遂する「自己調整学習」の確立を目指したい。
	6 主体的・対話的で深い学び・PBL	A	グループワーク等を通じて「他者との協働により思考を深める活動」が展開され、9割以上の生徒がその意義を肯定している。キャリア教育との関連付けも図られ、将来を見通した目的意識のある学びが実践されている。	対話的な学びの「形式」は整備されたが、議論の「質的深まり」においては個人差が散見される。生徒が自ら問いを立て、対話を通じて最適解や納得解を導き出す、探究的な学習プロセスの高度化を図りたい。
	7 3 ションプログラムつけたい力	B	プレゼンテーション能力の伸長が著しく、87%の生徒が自己表現に自信を深めている。教職員間で「育成すべき資質・能力」の共有が進み、教育課程全体を通した指導の一貫性が担保されている点は大きな成果である。	P D C A サイクルのうち、「Plan (計画)」と「Check (評価)」に関する生徒の実感値が6割台に留まる。活動を一過性のものとせず、自己評価と改善のプロセスを意図的に授業へ組み込み、自律的な改善力を養う必要がある。
徳	8 道徳・SEL・PBIS	A	SEL (社会的情動的学習) の導入により、対人関係調整力や他者受容の精神が育まれ、安心・安全な集団風土の醸成に寄与している (生徒肯定率92%)。教職員の共通理解も深く、組織的な生徒支援体制が機能している。	「ポジティブカード」の取組効果に停滞感(肯定率60%)が見られる。活動の形骸化を防ぐため、発達段階に応じた相互評価システムへの転換や、ボランティア活動への自発的参画を促すなど、新たな仕掛けが求められる。
	9 生徒指導 教育相談	A	教育相談の機会が確保され、生徒の94%が「先生は話を聞いてくれる」と回答するなど信頼関係は強固である。挨拶運動も定着し、生徒・教職員ともに100%近い実施率で学校全体の風土もよく、校内における規律ある風土が確立されている。	教師対生徒の関係は良好であるが、生徒間のトラブル解決能力や、校外・地域社会における規範意識（交通等）には課題が残る。学校外においても自律的に行動できるよう、道徳教育や特別活動との有機的な連携を強化したい。
10 健康・安全教育	A	交通安全や防災に関する指導が徹底され、生徒の危機管理意識も95%と高い水準にある。登下校時の安全確保や健康管理指導が継続的に行われ、事故防止および心身の健康維持に大きく貢献している。	自らの命や健康を「主体的に守る」という当事者意識の更なる高揚を目指したい。地域と連携した実践的な防災訓練の拡充や、心身の健康課題について生徒自身が思考・判断する機会を創出し、実践力を涵養する。	
11 保護者・地域との連携	A	H P等を活用した戦略的な広報活動により、保護者の「学校理解度」が96%（昨年度比大幅増）に達したことは特筆すべき成果である。学校の教育活動に対する理解と協力が得やすい良好な関係基盤が構築されている。	情報発信の「量」は確保されたが、双方向の連携や地域人材の活用については深化の余地がある。保護者や地域住民が学校運営の当事者として参画できる仕組みを構築し、「地域とともにある学校」の実質化を推進したい。	

【A：十分できている

B：できている

C：できていない部分がある】

※評価については、すべての評価項目4件法上位2観点の平均80%以上：A 60%未満：C